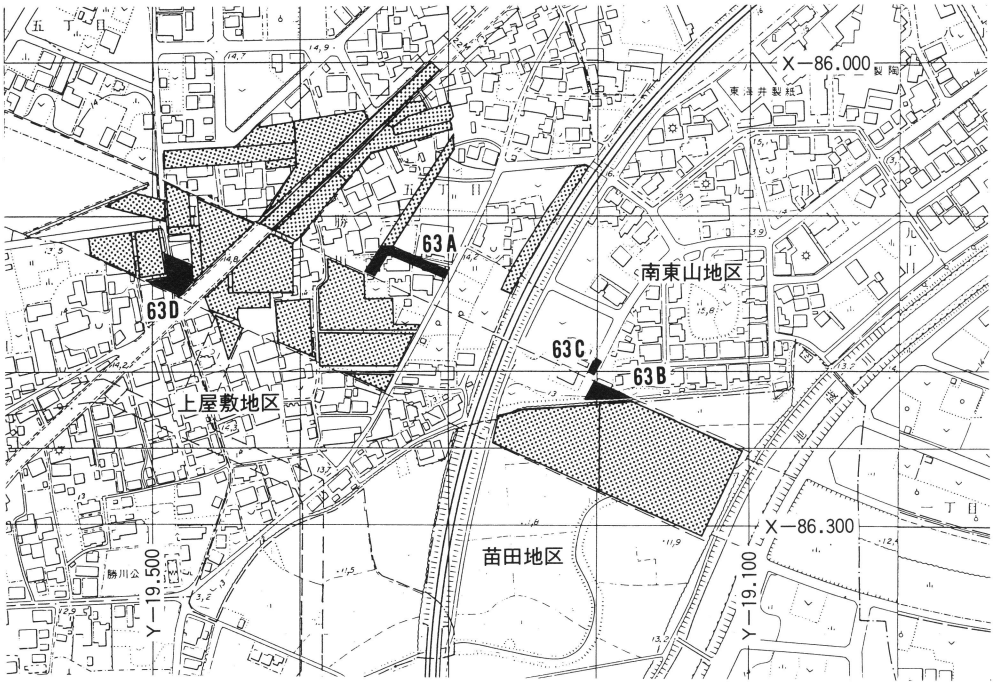
勝川（かちがわ）遺跡

調査経過

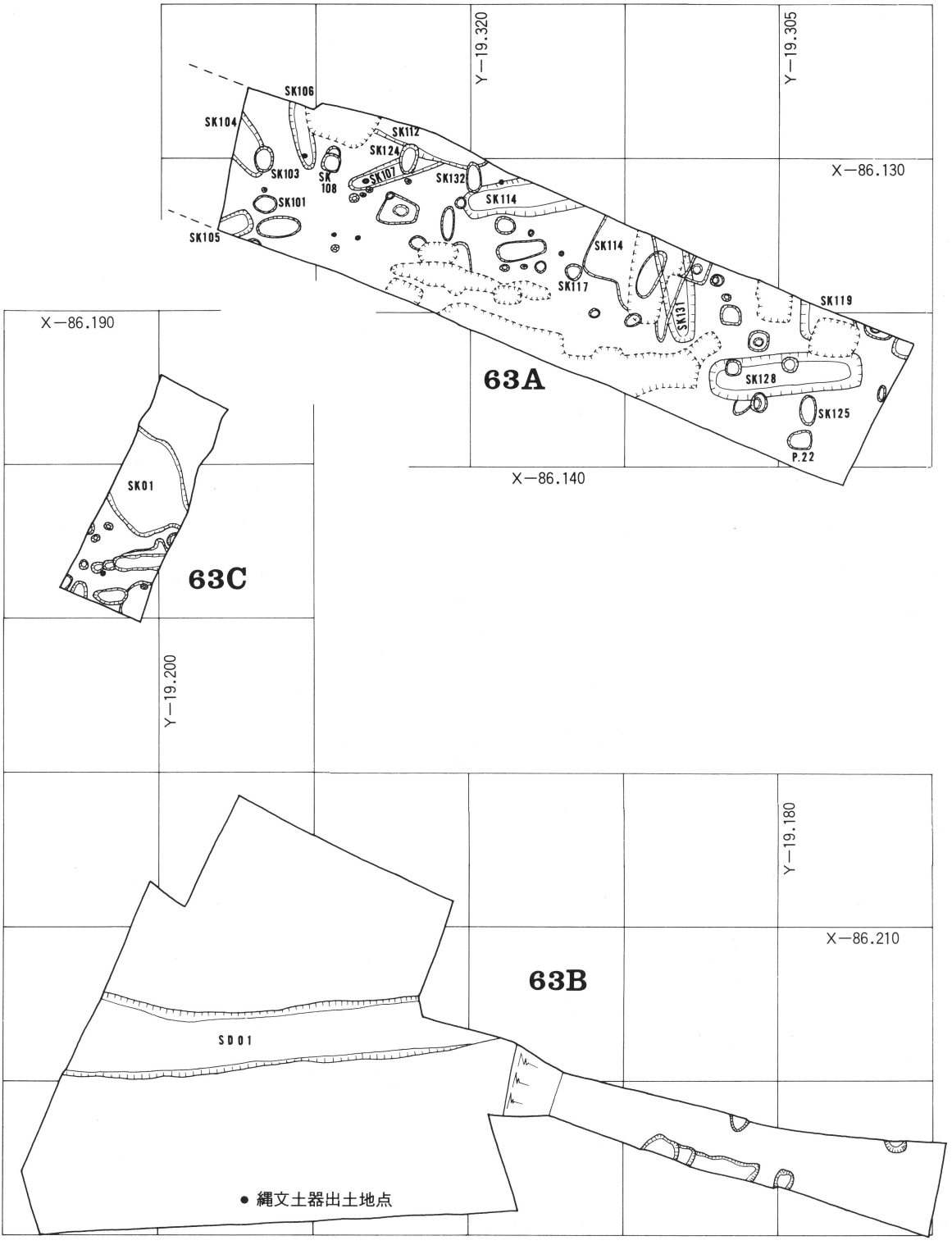
勝川遺跡は鳥居松面とよばれる標高13mの洪積段丘上の南東側に立地している。その段丘下付近を地蔵川が南流している。東西550m・南北350m程の広がりをもっていて、小字名により南東山地区・上屋敷地区・苗田地区と３区分している。勝川廃寺関連の調査が発端となって以来、現在では勝川Ⅰ期（弥生時代中期）、Ⅱ期（弥生時代後期～古墳時代前期）、Ⅲ期（勝川廃寺：奈良～平安時代）、Ⅳ期（勝川宿：江戸時代）の４時期の複合遺跡として位置づけられる。勝川Ⅰ期の遺構は南東山地区で竪穴住居・上屋敷地区に方形周溝墓・苗田地区に掘立柱建物群や木製未製品貯蔵土坑などがある。勝川Ⅱ期は上屋敷地区に方形周溝墓が多数ある。勝川Ⅲ期は、東西227m・南北148mの寺域が推定され、その中に掘立柱建物や溝がある。勝川Ⅳ期は下街道の宿場町関連遺構がある。

本年度の調査区は４ヶ所で、Ａ・Ｄ区が上屋敷地区、Ｂ・Ｃ区が南東山区にあたる。Ａ区で勝川Ⅰ～Ⅲ期、Ｂ・Ｃ区で勝川Ⅰ～Ⅱ期、Ｄ区で勝川Ⅳ期の遺構が確認できた。



■ 63年度発掘調査区　▒ 前年度までの発掘調査区

第Ⅰ図　勝川遺跡調査区位置図（1/5000）



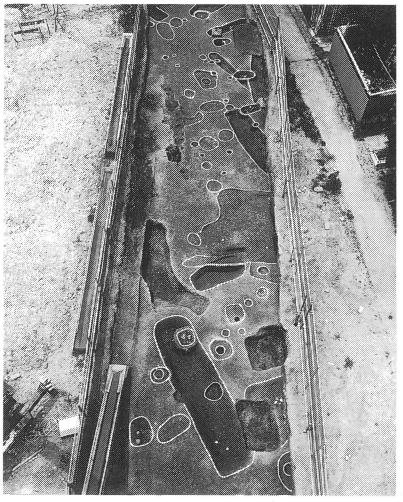
第２図　Ａ・Ｂ・Ｃ区主要遺構図（1/200）

各調査区の概要

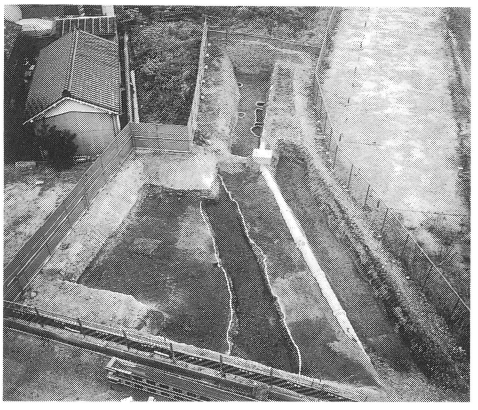
A区　勝川Ⅰ・Ⅲ期の遺構が検出された。勝川Ⅰ期は方形周溝墓４基で、一部調査できた。ＳＺ01（ＳＫ128)、ＳＺ02（ＳＫ131と114)、ＳＺ03(ＳＫ106と107)、ＳＺ04(ＳＫ104と105）はいずれも４隅に陸橋部をもつものである。方位もほぼ同一の方向であり、周溝の様相も似ている。ＳＺ01は長4.7ｍ・幅1.3ｍ・深70cmと規模が大きく土器(第３図２、３）が出土し３は上層で２は底面から出した。中期前半の時期と考えられ、勝川遺跡では古相の方形周溝墓である。ＳＺ02は幅1.2ｍ・深50cmで遺物は少量出土した。ＳＺ03・ＳＺ04は遺物がほとんどなく、ＳＺ03は北へＳＺ04は西に拡がるだろう。時期は高蔵期頃と考えられる。

勝川Ⅲ期はＳＫ108・112・118・119・124・132などがある。それらは埋土より瓦片が出土し、中でもＳＫ112は瓦が重なり合う程であった。それらに混じって須恵器杯11が下層より出土した。他の遺物として、須恵器10・12・13や灰釉陶器14・15が出土した。杯10がＳＫ124下層で皿14が上層より出土し、蓋12がＳＫ118下層、蓋13がＳＫ133中層、浄瓶の頸部15がＳＫ119下層で出土した。勝川廃寺に関連する遺構は十分に解明できなかった。

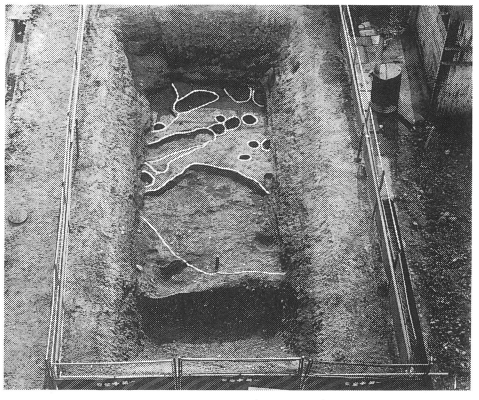
B区　勝川Ⅰ期の遺構にＳＤ01があげられる。その溝は幅1.6ｍ、深40cm程であり、鳥居松段丘縁辺に伴行して東西にのびている。溝の下層や底面より多量の土器(第３図３～８）が重なり合う程に出土した。６と８は



A区　全景（東より）



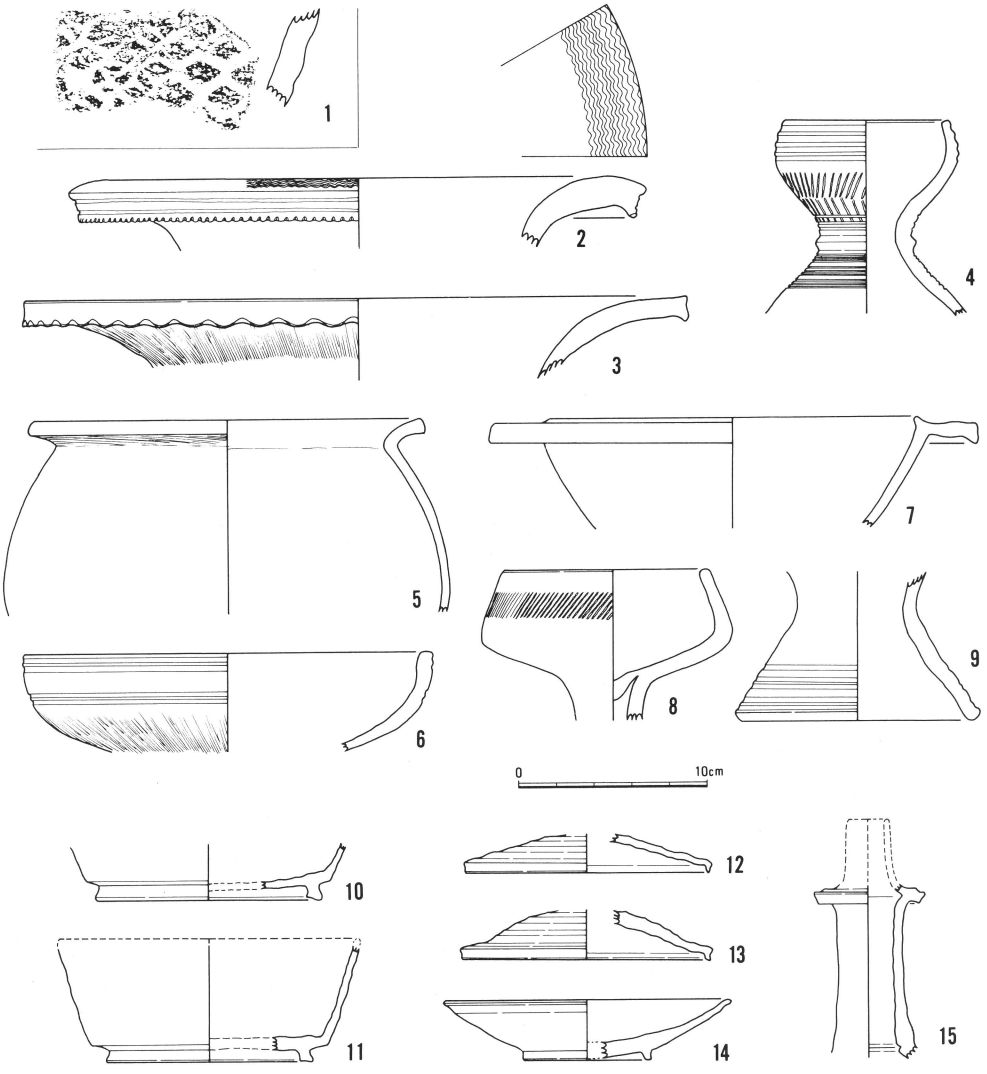
B区　全景（西より）



C区　全景（北より）

同一個体である。壺３・高杯６・８は凹線文を施している。甕４・高杯５～７などがあり器種では甕が最も多く出土した。時期は高蔵期頃と考えられる。縄文時代早期の押型文土器１が、段丘下にあたる南壁付近の堆積中から出土した。

Ｃ区　勝川Ｉ期の遺構が多くあげられる。ＳＫ01は長2.8m、深30cm程の大きさで、埋土より多くの土器が出土した。時期は高蔵期頃と考えられる。他の遺構は規模が小さく、遺物もほとんど出土していない。　（神谷友和・野口哲也）



第４図　出土遺物（１のみ1/2、他は1/4）